2021 年 1 月 17 日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 14 章 15～17 節

説教題：共にいる助け主

ある本で「エレノア」という方の証しを読みました。この方は、若い時にご主人とお嬢さんを病気で、しかも同じ時期に亡くしたのです。周りが見ていても、「立ち上がれるのだろうか」というような状況の中だったそうです。しかし彼女の中で神の業が始まりました。彼女は、そんな状況の中で「温かい思い」、「将来への希望」、「他の人の痛みに対する憐れみ」、そのような思いに満たされて行ったそうです。エレノアさんは「神の奇跡だ」と言っています。詳しいことは分かりません。しかし今、彼女は、新しいご主人と大学で教えながら、神を宣べ伝えています。ある神学者が言いました。「人を救うのは道徳ではなく神秘だ」。信仰を持っているからといって、思い通りになるわけではありません。そうでないことが多い。しかし私達は、私達に働く神秘に期待できること、それは素晴らしい特権だと思います。その神秘を為して下さるのが神の御霊(聖霊)なのです。

イエス様の告別の説教が続きます。イエス様は、ご自身がもうすぐ弟子達から離れて行くことをご存知で、弟子達を教え、励ます説教をされました。前回は、弟子達に「彼らがイエス様の宣教の働きよりもさらに大きな働きをする」ということを語られ、また「御心に適う祈りは聞かれる」という励ましを語られました。その続きです。ここでイエス様は、さらに大きな励ましの言葉を語られます。それは「助け主(聖霊)を与える」という励ましです。そのことは、2000 年後を生きる私達への励ましでもあります。「聖霊を与えられるとは、どういうことなのか」、学んで行きましょう。

聖霊の約束は 15 節の「もし、あなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです」(15)という言葉から始まります。「戒めを守る」という言葉は、嫌われる言葉だそうです。「『イエス様を愛する』というのは良いけれど、『戒めを守る』というのは暗い、『愛』と『戒め』は合わない」と、ある人々は言うそうです。しかしイエス様は、はっきり「わたしを愛するなら…わたしの戒めを守るはずです」、言い換えると「私の戒めを守ることで、私への愛を見せて欲しい」と言っておられるのです。イエス様は、沢山の信仰生活の祝福の原則を教えて下さいましたが、ここで直接的に指し示されているのは 13 章 34 節の「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(34)の戒めではないかと思います。イエスは、後に残して行く弟子達に、そして私達に、祝福の原則として「互いに愛し合いなさい」と言われました。それも「罪あるお互いを赦しと忍耐と持って愛しなさい、愛し合いなさい」と言われたのです。しかし私達の愛は、イエスが教えて下さった愛、期待して下さった愛から遠いと思うのです。ある人は言いました。「私は家内が良くしてくれる時には、彼女を愛することが出来るけれど、良くしてくれない時には愛することが出来ない」。私達の愛には、どこか自己中心が入っているということではないでしょうか。そして、その自己中心のために、愛しているはずの人に痛みや悲しみを与えてしまうことがあるということなのでしょうか。私

は、14 年間、教師をしましたが、「子ども達のために」と言いながら「実は自分のためだった」ということが沢山あったことを思います。時々子ども達に謝りたい気持ちになることがあります。もう 20 年以上前になりますが、千葉の神学校で学んでいる時、昔教えた子ども達と再会しました。連絡を取るためにある男の子が電話をくれましたが、彼の声を聞いた瞬間、ある場面が頭の中にパーッと浮かんで来て、初めに言った言葉は「あの時は悪かったね」という言葉でした。愛することが大切であることは知っています。しかし私達の愛は、どこか自分勝手な、不確かなものではないでしょうか。皆さんはいかがでしょうか。私達が、本当に誰かを愛して行こうとしたら、イエス様の教えを良く聞いて、自分の感情ではなく、イエス様の戒め、イエス様の教えて下さった愛し方で愛して行く、その時、私達も、本当の意味で誰かを愛することが出来て、信仰生活の祝福の原則としての愛に生きることが出来るのではないでしょうか。そして、そのようにイエス様が戒めて下さった愛に生きる時、それがそのままイエス様を愛することだと、「あなたはわたしを愛している」と、イエス様が認めて下さるのです。

しかし実際、難しいことです。だからこそ、イエス様は 16 節で「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります」(16)と約束して下さいました。この「助け主」と訳されている言葉は、元々の意味は「呼べば傍らに来てくれる者」です。なぜ呼ぶのか。助けて欲しいからです。祝福の原則を生きるためには助けが必要です。共にいてもらいたいのです。それだけではない、人生にやって来る困難に独りでは耐えることが出来ないのです。慰めや励ましが必要なのです。ある神学者は、この「助け主」を「困難や苦悩の中にある人を助けるために呼ばれた者、苦しんでいる者に再び勇気を与える者」と説明しています。なお「新共同訳」は、「助け主」を「弁護者」と訳しています。「弁護者」という言葉で思い出すのは「ヨブ記」です。あまりに辛い状況に苦しんでいるヨブがこう叫びます。「わたしのために争ってくれる者があれば、もはや、わたしは黙って死んでもよい」{ヨブ 13:19(新共同訳)}。ヨブは、自分の傍らに在って慰め、助けてくれる存在を心底求めたのです。私達は、聖霊と言う弁護者を与えられていること、大きな特権ではないでしょうか。しかも「その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです」(16)とあるのです。私達に与えられる聖霊は、今も私達と一緒にいて、私達を助けて下さる、私達が死んでも一緒にいて下さる、私達がやがて神の裁きの前に立った時にも、そこでさえ聖霊は一緒にいて下さるのです。私達を弁護して、私達をかばって下さるのです。イエス様は、そんな聖霊を与えると約束して下さっています。

それでも、聖霊と聞くと、掴みどころのない感じがするかも知れません。しかし、イエス様は弟子達に言われました。「あなたがたはその方を知っています」(17)。なぜ、弟子達は聖霊を知っているのでしょうか。まだ聖霊は下っておられません。弟子達が知っているのはイエス様です。弟子達をかばい、守って来られたイエス様です。やがてイエス様が逮捕される時も、イエス様は、ご自分が盾になって弟子達を逃がして下さるのです。そのイエス様なら、弟子達は知っています。どういうことかというと、三位一体の一角を占める聖霊は、同じ三位一体の

一角を占めるイエス様だと、聖霊は見えないイエス様だと、理解出来るのです。イエスは2000年前に地上を歩かれた方です。でも私達は今、見えないイエス様と共に生きて行くことが出来るのです。それが、聖霊が与えられているということです。

その聖霊(イエス様)は、今も私達に聖書を通して語って下さっています。ヨハネの時代も、世の人々はキリストを知らず、聖霊を知らず、教会を迫害していました。誤解され、迫害され、クリスチャン達が、教会が、内に、内に閉じこもってしまいそうになる、そのような時にこの「福音書」は生まれたと言われます。そして、教会にやって来られた聖霊の働きによって、彼らは、教会は、励まされ、立ち上がり、前に向かって宣教の歩みを進めて行ったのです。「イエス様こそ『道であり、真理であり、命なの…』(6)だ」と、「救いはここにしかない」と、証しをして行ったのです。

その同じ聖霊が、私達にも与えられている、私達も聖霊の働きを受けながら歩いて行けるのです。主の言葉に、主が教えて下さった祝福の原則に生きて行けるのです。それが、この聖書個所の約束です。

昨年、私達は、共に礼拝していた3人の仲間を天に送り、今も寂しい思いをしています。新型コロナウイルス感染症のこのこともあり、心が内向きになりがちではないでしょうか。私自身が、どこかでそうなのです。しかし、私達は、この個所に励まされます。私達は1人で生きて行くわけではない。私達がどんなところに居ようとも、どんな困難を感じていようと、私達には「聖霊(助け主)を与える」というイエス様の約束があるのです。

話が少しとびますが、「エゼキエル書」の中に「枯れた骨の谷の幻」があるのをご存知の方もいらっしゃると思います。預言者エゼキエルが、主に導かれてある谷間に立ちました。その谷間には、至る所に人の骨が散らばっていました。しかも、その骨は、干からびているのです。その骨に「生き返るように預言せよ」と、エゼキエルは神様から言われるのです。エゼキエルが預言すると、散らばっていた骨が互いにつながり、その上に肉がつき、皮膚が覆い、やがてそれらは生き返り、自分の足で立ち、大群衆となるのです。幻です。しかし、その幻には意味があったのです。干からびた骨は、イスラエルの人々の状態でした。バビロン捕囚によって異教の地に連れて来られたイスラエルの人々は、あたかも干からびた骨のような、絶望的な状態だったのです。身の回りの現実もそうでした。自分達の将来に何の希望もなかったのです。むしろ、自分達は滅んでしまうのではないか、という恐れの中にいたのです。三浦綾子文学館の森下先生が言っておられました。「『花咲か爺さん』のお爺さんは、ポチから裏の畑を『ここ掘れ』と言われる前、裏の畑を何十年も掘り返して来て、そこには何も良いものは埋まっていないと誰よりも知っていた、『もう自分には良いものなんか何もない』と人生を諦めていた」。イスラエルも、そういう状態でした。いや、もっと深刻です。世の現実、置かれた状況、自分達の小ささに圧倒されていました。谷に散らばっていた骨は、神に希望を持たない人々の心の状態でもあったのです。しかし「花咲か爺さん」がポチに励まされて、希望を持って畑を掘ったように、絶望的な状態にあるイスラエルの人々に、神はエゼキエルを通して、谷間に散らばっ

た干からびた骨が、みるみると生き返って、大群衆となるという幻を見せて下さったのです。現実は厳しい。しかし神は「神ご自身にあって起死回生の望みがある」ということを示されたのです。その場面で「エゼキエル書」にはこうあります。「わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちに入れると、あなたがたは生き返る」(エゼキエル 37:14)。つまり、そのことをして下さったのは聖霊なのです。聖霊が働かれると、枯れた骨でも生き返るのです。実際イスラエルは、やがてペルシャによって造られた特別の道路を歩いて、自分達の故郷に凱旋将軍のように帰って行ったと言われます。そうやって主の御心を生きて行くのです。私達の人生も、聖霊が注がれると不思議が起こるのです。神様の憐れみが、力が、私達にも働くのです。私達もきっと御心を歩いて行けるのです。教会もそうです。ある牧師が言いました。「どんなに沈滞している教会であっても、主の御霊が注がれた時に、リバイバルが起こる」。祝福の歩みが始まるのです。

聖霊をあなた方に与える、それがイエス様の約束です。私達は、イエス様の戒めに、祝福の原則に生きるためにも、聖霊の助けが必要です。困難な状況の中で、希望を持って前に歩いて行くためにも聖霊の助けが必要です。その聖霊を、「助け主」を、「弁護者」を送ると、与えると、イエス様は語って下さいました。大切なことは、私達が聖霊の働きを待ち望むことです。私達の信仰の中に、御言葉と共に働く聖霊を待ち望み、期待して行くような、そのような部分を持ちましょう。静まって神に祈り、聖霊の働きを願いましょう。キリスト教の神秘を、私達も経験することが出来るに違いありません。